

不顕性の水俣病

遺体の病理解剖で判る

発病のおそれはない

熊大 医学部 脳細胞に同じ病変

視野狭窄(さく)や言語障害などで苦しむ水俣病―その水俣病患者とは言えないが、脳細胞などに水俣病と同じ病変のある人がいることが最近、熊大医学部第二病理学教室(武内忠男教授)の解剖結果でわかった。同教授はこれを「不顕性水俣病」と名づけている。近く医学関係誌に発表するが、同時に同教授は「不顕性水俣病ではあっても、これまで症状の出なかった人に将来症状が出る心配はない」と強調し、学界への発表によって社会不安が起きることのないよう付け加えている。



武内忠男教授

解剖例はことしの二月の胃出血で死亡した宮北郡津奈木町の開業医松本敬さん(67)で、松本さんは生前、病理学教室に病理解剖を依頼していた。

解剖の結果、松本さんの脳細胞には「患者ほど顕著ではないが、顕微鏡でみれば水俣病患者と同じ病変、つまり脳細胞の脱落があった」という。

また松本さんの体内には相当量の水銀がたまっていた。たとえば、正常な人だと脳は0.0005PPM、肝臓は0.02PPM、シン臓は0.3PPMだが、松本さんからは大脳から2.03PPM、小脳から2.12PPM、肝臓から7.8PPM、シン臓からは28.12PPMもの水銀が検出された。

このように多量の水銀が検出されたことから同教授は「体内の水銀は比較的短い年月で体内から排出されるのが通例だ。松本さんは水俣湾の魚が危険だと騒がれた三十三、四十四年当時以降もかなり長い

期間、水銀を含む魚を食べていたと考えられる」とみている。

松本さんのように、水俣病と同じ病変はあっても患者の特徴である視野狭窄、言語障害、運動失調が起きない人もいるわけで、このため同教授は「患者とは言えないが病変はある不顕性水俣病」と名づけているわけ。

このような人がどの程度いるかはわからないが、同教授は「患者を出した家族や胎児性水俣病患者を産んだ母親に、いる可能性があると話す。水俣病患者は二十九日の第十五回水俣病研究会で新たに五人が追加され、百十六人になった

たが、患者の症状はなくても水俣病と同じ病変のある人が他にみることが同教授によって立証されたことになる。

ただ同教授は「水銀で一度汚された脳細胞は新しく出来ず、留されたところはコン跡として残る。だから水俣病の症状の出る人はもうかなり以前に出ているはずだ。逆にいえば、いままで出なかった人に将来新たに症状が出ることは絶対考えられないので不安がある必要はない」と強調する。

武内教授の話 不顕性水俣病は症状がないから患者とはいえない

が病変はあるといういわば中間的な人だ。チツが今後水銀さえ流さなければ、新たな胎児性患者は生まれないだろうし、いままで正

常な生活をしていた人に将来症状が出ることもない。不顕性水俣病であるかどうかは解剖してみなければわからず、他に診断の方法はない。松本さんの場合、手がふるえていたというが、水俣病によるものか老人の動脈硬化によるものか私にはわからない。

松本さんの四男次さん(三) 医師

師の話 父は医者だったし解剖してもらうことは当然だと考えていたと思う。しかし水俣病ではないかとの疑いがあつて武内教授に解剖してもらったのではない。町で六十年間も開業(内科と眼科)していたし、患者さんからよく近海魚をもらつていた。しかも魚が好きだった。また水俣病患者の実態も知つていたし、津奈木町でも水俣病患者を発見したのは父だ。冗談で、このあたりの魚を

食えば水俣病になるぞ」と言つていたくらいだ。武内教授が病理学上から判断されたもので、臨床の私たちには判断できない。ただ父は手がふるえていた。

貝塚環境衛生課長の話 水俣病は臨床、病理の両面から判定しなければならぬが、松本さんの

場合は臨床面に現われていなかった。なので、わからなかったのだろう。松本さんのようなケースがないとはいえないだろう。が、たとえば、結核が治ゆしたあとも、肺にキズはのこるものの、患者とはいわないように、臨床面に現われない限り水俣病患者と診定する

ことは困難だ。頭髪の水銀も年々減るため一昨年検査を打ち切つてゐる。工場から水銀はでていないし、現在症状のない人が、将来症状が出ると思えないが、果として将来とも診定の申請さえあれば、検査のち水俣病審査会で判定してもらつてもいい。